

場所 青森県青森市

面積 0.37ha



活動目的 「人間と水生生物が共存する居心地の良い空間づくりをすること」を目的に掲げ、地域住民、観光客の憩いの場の創出及び魚類のゴミの誤食を防ぐため海岸及び海中清掃の実施及び気候変動対策としてのCO2の吸収源及び生物多様性を創出するためにアマモの保全活動（種子播種、移植、モニタリング）を実施。

サイト概要 青森県により、青森港湾区域内に整備された人工海浜（通称：あおり駅前ビーチ）。2021年7月から、NPO法人、地元企業、青森市、一般財団法人などの連携にて、人間と水生生物が共存する居心地の良い空間づくりをすることを目的に掲げ、海岸及び海中清掃、気候変動対策としてのCO2の吸収源及び生物多様性を創出するためにアマモ及びスゲアマモの花枝採取、播種、栄養株の移植（アマモ場保全）活動をしている。2023年にはアマモ群落が密生する275㎡のアマモ場が形成され、23種類の水産動物、3種類の植物が確認されている。また、環境教育の場や地域住民、観光客の憩いの場となっているため、まちなかの里海として機能している。

土地利用の 変遷

青函連絡船（1988年終航）の発着所であった岸壁を、地元の要望を踏まえ、かつて（明治時代以前）の砂浜に戻し、「人と海とのふれあい再生」を目標に掲げ、2015年、国と青森県は、人々の身近に海とふれあえる自然豊かな空間を形成することを「青森港ビジョン」に明記した。その後、青森県は2016年から干潟造成事業に取りかかり、2021年7月に人工海浜（規模：砂浜部3,500㎡、干潟部1,500㎡、海中部2,000㎡）が開園し、「あおもり駅前ビーチ」と名付けられた。

サイト周辺の 環境

あおもり駅から徒歩2分と市街地に位置する。サイト周辺は住宅やマンションも多く、ウォーターフロントエリアとして、観光施設やクルーズ客船の発着所が近いいため観光客も多い。そのため安らぎの場となっており、まちなかの親水空間、憩いの場となっている。

アピール ポイント

人々が身近に海とふれあえる自然豊かな空間を形成することを目的に、海のゆりかごとも言われているアマモ場の再生に伴うCO2吸収源としてのブルーカーボン、生物多様性の創出することで、まちなかの里海としてアマモの重要性や生物多様性について発信していく。自然共生サイトに登録することで、里海づくりのフラグシップとなり、活動を陸奥湾全体に広めていきたい。

生物多様性の価値

価値（4）生態系サービスの提供の場であって、在来種を中心とした多様な動植物種からなる健全な生態系が存する場

【場の概況】

2021年7月から自生するアマモの種子播種を行い、その後2023年にはアマモ群落が生息する状態となり275㎡のアマモ場を創出し、23種類の水産動物を確認している。水産動物の生息場となり、生態系サービスを有している。

【主な植生】

275㎡のアマモ場の形成と70株のスゲアマモ、アナアオサの生息が確認された。

【確認された主な動植物など】

- 【魚類】 ・ シロメバル (*Sebastes cheni* Barsukov, 1988) ・ エゾメバル幼魚(*Sebastes taczanowskii*)
 ・ クロソイ (*Sebastes schlegeli*) ・ クロダイ幼魚 (*Acanthopagrus schlegelii*) ・ ウミタナゴ (*Embiotoca jacksoni*) ・ オキタナゴ (*Neoditrema ransonneti* Steindachner) アナハゼ (*Pseudoblennius percoides* Günther, 1861) ・ アカカマス (*Sphyræna pinguis* Günther, 1874) ・ メジナ (*Girella punctata* Gray, 1835) ・ ハナジロガジ (*Opisthocentrus tenuis* Bean and Bean, 1897) ・ ダイナンギンポ (*Dictyosoma burgeri* van der Hoeven, 1855) ・ キヌバリ (*Pterogobius elapoides* (Günther, 1871)) ・ ゴマサバ (*Scomber australasicus* Cuvier, 1831) ・ マコガレイ (*Pseudopleuronectes yokohamae*) ・ ポラ (*Mugil cephalus* Linnaeus) ・ カワハギ (*Stephanolepis cirrhifer*) ・ ウマヅラハギ (*Thamnaconus modestus*) クサフグ (*Takifugu alboplumbeus*(Richardson, 1845)) ・ マイワシ (*Sardinops melanostictus*)
 ・ ハナオコゼ成魚(*Histrio histrio*) ・ ヨウジウオ (*Syngnathus schlegeli* Kaup, 1856)
- 【頭足類】 ・ アオリイカ(*Sepioteuthis lessoniana* Férussac in Lesson, 1832 [shiro-ika])
- 【甲殻類】 ・ イシガニ (*Charybdis (Charybdis) japonica*)
- 【海草藻類】 ・ アマモ (*Zostera marina*) ・ スゲアマモ (*Zostera caespitosa* Miki) ・ アナアオサ (*Ulva pertusa* Kjellman, 1897)



写真の説明：アマモに生息するハゼ



写真の説明：アマモ場とクロダイ

生物多様性の価値

価値（6）希少な動植物種が生息生育している場あるいは生息生育している可能性が高い場

【場の概況】

サイト内にはスゲアマモの栄養株70株が生息している。栄養株は2021年11月8日、2022年7月8日及び2024年7月3日に、青森県東津軽郡平内町浜子海水浴場地先（青森県東津軽郡平内町浜子）から各々10株、10株、60株ずつ採取し、サイト内に移植したものである。生息している栄養株70株中10株は2021年11月8日、2022年7月8日に移植したものが、定着したものである。

【確認された希少種】

・スゲアマモ、学名：*Zostera caespitosa*、レッドリストカテゴリ：環境省レッドリスト2020、準絶滅危惧（NT）、青森県レッドデータブック（2020年版）要調査野生生物Dランク（対応する環境省カテゴリー）、ライフステージ：栄養株、調査方法：潜水による目視観察及び写真撮影



写真の説明：生育しているスゲアマモの様子



写真の説明：生育しているスゲアマモの様子

サイトの活動計画・モニタリング計画

活動計画の内容	モニタリング計画の内容
<p>【概要】</p> <p>①人と水生生物が共存する居心地のいい空間づくりのために、水産動物のゴミの誤食を防ぐため、人にとっても居心地のいい空間をつくるため海中及び沿岸の清掃活動及びアマモ及びスゲアマモ場の造成、保全活動を通して、生物多様性及びCO2の吸収源を創出する。特にスゲアマモはアマモに比べ、叢生であり根が密生しているので、移植もしやすく、最大光合成活性はアマモより低いが呼吸も低いため、スゲアマモの方が、低い光量子量の環境でもCO2交換が行われる。そのため、サイト内の日陰を中心にスゲアマモを移植し、モニタリングを続ける。</p> <p>②地元小、中学校や社会へのアマモの啓発、海洋教育活動及び企業等とCSR活動の連携を継続し、まちなかの里海として機能の継続及び情報を発信し、里海づくりの重要性を身近に感じさせる。さらに、陸奥湾内におけるアマモ場の保全・造成活動を通して里海づくりのエリアを増やしていくことで、生物多様性の向上、気候変動対策及び漁業資源の増大につなげていく。</p>	<p>【モニタリング対象】 アマモ及びスゲアマモ、水生生物、鳥類</p> <p>【モニタリング場所】 サイト内</p> <p>【モニタリング手法】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○アマモのモニタリング：潜水による目視観察、写真撮影 ○アマモ場面積調査：ドローン及び潜水による目視観察、写真撮影 ○水生生物調査：小型定置網及び潜水による目視観察、写真撮影 ○鳥類調査：目視及び写真撮影 <p>【モニタリングの実施時期及び頻度】</p> <ul style="list-style-type: none"> ○アマモのモニタリング：4月-12月、4回 ○アマモ場面積調査：6月-7月、1回 ○（スゲ）アマモ栄養株移植：6月-7月、1回 ○アマモ花枝採取：6月、1回 ○生物調査：4月-12月、4回 ○鳥類調査：4月-12月、4回 <p>【モニタリング実施体制】 NPO法人あおりみなとクラブ、志田内海株式会社、八戸工業大学地域産業総合研究所</p>